国主はにくみ給ふ。万民はとぶらはず。冬は雪道を塞ぎ、夏は草をひしげり、鹿の遠音うらめしく、蝉の鳴声かまびすし。訪人なければ命もつぎがたし。はだへをかくす衣も候はざりつるに、かかる衣ををくらせ給こそ、いかにとも申ばかりなく候へ。見し人聞し人だにもあはれとも申さず。年比なれし弟子、つかへし下人だにも、皆にげ失とぶらはざるに、聞もせず、見もせぬ人の御志哀れなり。偏に是別れし我が父母の生まれかはらせ給けるか。十羅刹の人の身に入かはりて思よらせ給歟。

（弘安元年九月六日）